

チャハルモンゴル語の外来語発音における母音の調和と変化： 有標性と位置的忠実性に着目して

金正琳
mongolian2014@126.com

1

1. 背景



→ モンゴル：
ハルハ方言(公用語)
→ 内モンゴル：
チャハル方言(標準語)

2

1.1 両言語の主な共通点：

- 文法

(1) 語順が同じ。

/mu:r dʒagas idne/
猫 魚 食べる

- 母音調和

一つの単語内の母音はある規則に従わなければならない。

3

1.2 両言語の主な相違点：

- 表記

(2) ハルハ方言 → キリル文字
チャハル方言 → 縦書き文字

- 母音

(3) ハルハ方言 → /a,ɘ,i,ɔ,ɔ,ɛ,u/
チャハル方言 → /a,ɘ,i,ɔ,ɔ,ɛ,u/

4

1.3 母音調和：

チャハル方言：

基本 7母音 → /a,ɘ,i,ɔ,ɔ,ɛ,u/の内、

- (4) a. 男性母音 → /a,ɔ,ɔ/ 「馬」 /ado:/
b. 女性母音 → /ɘ,ɛ,u/ 「知識」 /ɔrdəm/
c. 中性母音 → /i/ 「食べ物」 /idə:n/ 「細い」 /narin/

[男性母音と女性母音は語内に共起できない。
[中性母音はいずれの母音とも共起できる。

5

- チャハル方言の固有語：

すでに定着しているため、表記と発音いずれも母音調和に従う。

- チャハル方言の外来語：

音訳借用(外国語を音のまま借用すること)なので、表記の上では母音調和に違反する場合がある。

しかし、実際の発音においては母音調和に違反したまま発音されることもあるものの、母音調和に従うように発音される場合も非常に多い。

- (5) 「メダル」 /mɛdal/ → [mɛdal] ([æ]は/a/の異音)
(表記) (発音)

→ 外来語の表記・発音における不一致性

6

2. 先行研究

2.1 母音調和

- ① ハルハ方言: 植田 (2018)
- ② チャハル方言: 宝 (2010)

2.2 外来語

- ③ ハルハ方言: 植田 (2013)
- ④ チャハル方言: 祗 (2014)・李 (2015)

7

① ハルハ方言: 植田 (2018)

- モンゴル語の母音調和は素性のスプレッドによって発生する。
初頭音節の母音はある素性を持っていれば、その素性が後続する母音にスプレッドし、すべての母音がその素性を持つことになる。

(6) 「空気」 /a g a: r/
 [F]
 ↘
 V g V: r
 | |
 [O] [O] [F]:pharyngeal [O]:open V:vowel

8

② チャハル方言: 宝 (2010)

- **第二音節**の母音は母音調和において重要である。
モンゴル語の母音調和において、初頭音節の母音は後続する母音の種類を決定する。しかし、後続する母音の音質に影響を与えるのは第二音節の母音である。

- (7) 「季節」 /olari/ → [olara] (ここで[a]は弱化母音として扱われる)
 (表記) (発音)

9

まとめ:

ハルハ方言・チャハル方言において、音節位置は単語全体の母音調和に重要な役割を果たす。ハルハ方言では第一音節が重要な位置であり、チャハル方言では第一音節とともに、第二音節も重要と指摘される。

本研究はチャハル方言の外来語を研究対象として、その発音と音節位置の関連性も見ると。特に、チャハル方言では重要なのは第一音節なのか、第二音節なのかを検証し、第一音節が重要であることを指摘する。

10

③ ハルハ方言: 植田 (2013)

- 外来語の接尾辞にも母音調和が見られる。
/i,e/を除いた語末に最も近い母音が接尾辞の調和を引き起こす。

- (8) 「輸入」 /import/ → [import-ʊʊ] (〜から)
 |
 語末に最も近い母音は/o/
 (9) 「アンテナ」 /anten/ → [anten-ŋaŋ] (〜から)
 |
 /e/を除くと語末に最も近い母音は/a/

11

④ チャハル方言: 祗 (2014)・李 (2015)

- 祗 (2014) では中国語から借用したモンゴル語の動詞と副詞の形成について論じた。

- 李 (2015) では中国語から借用したモンゴル語の母音変化について分析した。

→ 主に外来語の形成について研究である。

12

まとめ:

ハルハ方言では外来語に接尾辞が付く場合でも母音調和の現象が見られる。このことから外来語自体の発音も母音調和の影響を受けることが考えられる。

チャハル方言では主に外来語の形成過程についての研究が多い。本研究はチャハル方言の外来語の発音を研究し、母音調和との関連性、また母音の変化などを見ていく。

13

3. 問題点

- ハルハ方言の外来語と母音調和の関係を探究した研究は見られるが、チャハル方言に関しては見られない。
- チャハル方言の外来語の母音調和において母音がどのように変化するのは不明である。
 - どの母音を基準として調和するのか
 - その選択は何によって決められるのか

14

4. 調査・分析

4.1 調査対象

4.1.1 調査語彙:

チャハル方言の外来語において、母音調和に違反する2-4音節語49個(すべて短母音145個)(調査データは金(2019)から抽出した)

4.1.2 調査協力者:

チャハル方言の母語話者10人

15

4.2 調査方法

- 49個の外来語を10人の母語話者に発音させて録音した。
- 全ての発音データの有効数は475語、現れた母音数は1307である。
- 母音調和に従うように発音された単語は224語、母音数は668である。
- 母音調和率: $224/475 \approx 47\%$

16

* チャハル方言の基本七母音/a,ə,i,ɔ,u,e,u/の内、/e/は今回の調査語彙で表れず、また/u/は一つしかないので、本研究で分析対象になる母音は/a,ə,i,ɔ,u/五つである。

例えば、「カレンダー」という意味の/kaləndari/では男性母音/a/と女性母音/ə/が混用されるので母音調和に違反する。発音の中で話者によって、①[kalandari]、②[kələndari]と発音される場合がある。

①では、/ə/が[a]になり、男性母音の調和を引き起こす。

②では、/a/が[ə]になり、女性母音の調和を引き起こす。

このような母音の変化から、同じ変化特徴を現わす母音をそれぞれ分類し、その特徴を一般言語学的理論で説明する。

17

4.3 分析: 母音の分類方法

- 確精(1989)と呼和(2018)による、チャハル方言の「母音三角形」の主張

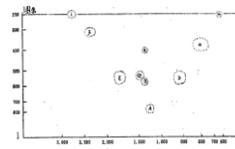


図1: 確精(1989)

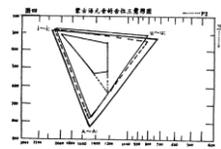


図2: 呼和(2018)

18

- チャハル方言において、母音/a,i,u/の分布は三頂点になり、母音三角形を成す。
- 本研究はこれに基づいて、三頂点の母音/a,i,u/を周辺母音、それ以外の母音を非周辺母音とする。

→ 周辺・非周辺という分類で、主にチャハル方言の外来語発音に現れる母音の変化特徴を分析する。これは母音調和に違反するかどうかを判断する男性・女性母音の分け方と独立した基準である。

19

4.4 分析結果

- 結果を全体の発音データ(A)と、そのうち母音調和に従う発音データ(B)で分ける。

A は本研究で扱った475語の調査結果であり、母音調和に違反する単語と母音調和に違反しない単語を含むすべての発音データである。
B は475語の内、母音調和に従うように発音された224語の調査結果である。つまり、母音調和の影響を受けた発音データである。

- 便利上、例に出す単語は、母音調和に違反しないものを黒色で、違反するものを赤色で示す。
- 文字通りの発音を//で、実際の発音を[]で示す。

20

4.4.1 母音の保持率

種類	母音	保持	非保持
周辺	a	88% (407/461)	12% (54/461)
	i	90% (180/199)	10% (19/199)
	u	72% (126/174)	28% (48/174)
	小計	85% (713/834)	15% (121/834)
非周辺	ɔ	35% (59/167)	65% (108/167)
	o	52% (159/306)	48% (147/306)
	小計	46% (218/473)	54% (255/473)
合計	71% (931/1307)	29% (376/1307)	

→ A: 母音の保持率(全体)

全体: = 71% (931/1307)
周辺母音: = 85% (713/834)
非周辺母音: = 46% (218/473)

全体的に見ると、保持率が高い。それぞれ見ると、周辺母音の保持率は非周辺母音よりはるかに高い。

21

種類	母音	保持	非保持
周辺	a	75% (152/202)	25% (50/202)
	i	83% (99/119)	17% (20/119)
	u	72% (46/64)	28% (18/64)
小計	77% (297/385)	23% (88/385)	
非周辺	ɔ	28% (32/115)	72% (83/115)
	o	35% (25/168)	65% (143/168)
	小計	20% (57/283)	80% (226/283)
合計	53% (354/668)	47% (314/668)	

→ B: 母音の保持率(母音調和に従うように変化した語)

全体: = 53% (354/668)
周辺母音: = 77% (297/385)
非周辺母音: = 20% (57/283)

母音調和に従うように発音される場合、母音の保持率が著しく下がるが、周辺母音の保持率は圧倒的に高い。これに対し、非周辺母音の変化はより激しい。

22

(10) 「メダル」

/mədəl/

[mæta:l] [mitæ:l] [mæta:l] [mədəl] [mətəl]
[mæda:l] [mædal] [mədæl] [mætal] [mɔdæl]

非周辺母音/ə/は発音の中で、保持率が3/10である。
周辺母音/a/は発音の中で、保持率が8/10である。

23

4.4.2 母音の変化方向

入力/出力	→周辺母音	←非周辺母音
周辺母音	7%(10/142)	48%(77/160)
非周辺母音	93%(132/142)	52%(83/160)
合計	100%(142/142)	100%(160/160)

→ A: 母音の変化(全体)

非周辺母音 → 周辺母音: 132/142 = 93% (132/142)
周辺母音 → 非周辺母音: 77/160 = 48% (77/160)

非周辺母音から周辺母音へ変化するものが多い。

24

入力/出力	→周辺母音	→非周辺母音
周辺母音	6%(9/141)	28%(19/69)
非周辺母音	94%(132/141)	72%(50/69)
合計	100%(141/141)	100%(69/69)

→ B: 母音の変化(母音調和に従うように変化した語)

非周辺母音 → 周辺母音: 132/141 = 94%(132/141)
 周辺母音 → 非周辺母音: 19/69 = 28%(19/69)

母音調和に従うため、非周辺母音は積極的に周辺母音へ変化している。

25

(11) 「ギニア」

/ginəjə/
 [ginija] [ginija] [ginəjə] [ginəjə] [kinija]
 [kinija] [ginija] [ginija] [ginija] [gənəjə]

非周辺母音/a/は発音の中で7/10が周辺母音/i/になる。
 周辺母音/a/は発音の中で1/10が非周辺母音/a/になる。
 周辺母音/i/は発音の中で1/10が非周辺母音/a/になる

26

4.4.3 母音の保持率と音節位置

種類	第一音節	第二音節	第三音節	第四音節
周辺母音	90% (243/269)	81% (210/259)	85% (190/223)	84% (70/83)
非周辺母音	67% (117/175)	37% (68/185)	32% (33/103)	0% (0/10)
合計	81% (360/444)	63% (278/444)	68% (223/326)	75% (70/93)

→ A: 母音の保持率と音節位置(全体)

周辺母音・非周辺母音ともに第一音節で保持率が最も高い。
 全体的に見ると第二音節で母音の保持率が最も低い。

27

種類	第一音節	第二音節	第三音節	第四音節
周辺母音	89% (117/131)	73% (74/102)	72% (73/102)	66% (33/50)
非周辺母音	46% (43/93)	9% (11/128)	7% (3/43)	0% (0/9)
合計	71% (160/224)	37% (85/230)	52% (76/145)	56% (33/59)

→ B: 母音の保持率と音節位置(母音調和に従うように変化した語)

周辺母音・非周辺母音ともに第一音節で母音の保持率が最も高い。
 全体的に、第二音節で母音の保持率が最も低い。

28

(12) 「電子」

/ələktrən/
 [ələktrən] [ələktrun] [ələktrən] [ələktrən]
 [ələktrən] [ələktrən] [ələktrun] [ələktrən]
 [ələktrən]

第一音節の非周辺母音/a/は9/9で保持率が高い。
 第二音節の非周辺母音/a/は3/9で保持率が低くなる。

29

種類	保持率	変化方向	保持率と音節位置
A	非周辺母音 < 周辺母音	非周辺母音 → 周辺母音	第一音節で最も高い
B	非周辺母音 < 周辺母音	非周辺母音 → 周辺母音	第一音節で最も高い

* 母音調和に違反する外来語を母音調和に従うように発音する場合、周辺母音/a,i,uは変えずに、非周辺母音/a,o/を変化させることによって調和させている。つまり、周辺母音は発音において好まれる傾向がある。

* 第一音節の母音は発音の中で変化しにくい。

30

5. 考察

5.1 母音の有標性

Gordon (2016)

「母音の頻度によって、調音しやすい母音は無標で、調音しにくい母音は有標である」

例えば、3母音体系の言語では、/a,i,u/が一般的である。

チャハル方言の外來語の発音において、周辺母音/a,i,u/はより安定的で、変化しにくいのは母音の有標性制約が働いているからだと考えられる。

→ 有標性は:/a,i,u/ < /ə,ɔ/

31

5.2 位置的忠実性

Beckman (2003)・田中(2008)

「初頭位置は優越的位置 (privileged position)であり、音韻対立が保持されやすい。」

音韻対立の保持されやすさ・音韻現象の起こりやすさ:

→ 初頭位置 > (中間位置) > 末尾位置

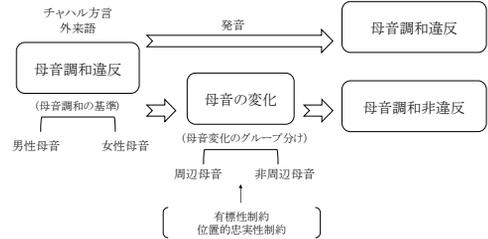
チャハル方言の外來語の発音において、第一音節で母音の保持率が最も高いことは位置的忠実性制約が働いているからだと考えられる。

32

6. まとめ

- チャハル方言の外來語は発音の中で母音の変化によって母音調和に従う構造になる現象が見られることを明らかにした。
- 母音調和の規則自体は男性・女性母音の分類で制約されるが、母音調和に従うための母音の変化には一般言語学的な制約が働いていることを明らかにした。
- 本研究でチャハル方言の母音を周辺・非周辺母音のように分類して、その変化特徴を母音の有標性と位置的忠実性で説明した。

33



34

7. 今後の課題

- 母音調和に違反する外來語の発音において、第一音節の母音は変化しにくいことを検証したが、先行研究で重要だといわれる第二音節の母音は後続する母音にどのような影響を与えるのかはまだ明らかではない。
- 発音の中で母音自体が削除される現象も良くあるので、これについて探究する必要がある。例えば、どのような状況で母音が削除されるのか、また、母音削除は母音調和とどの程度関係するのか。

35

参考文献

- 韓麗琦(2014)『モンゴル語チャハル方言における漢語借用一動詞と副詞の借用を中心に―』千葉大学大学院 人文社会科学研究科博士論文。
- 植田尚樹(2013)『モンゴル語の母音調和と母音の弱化―外來語を用いた分析―』京都大学言語学研究所32.37-76.
- 植田尚樹(2018)『モンゴル語の母音に関する総合的研究』京都大学博士論文。
- 金正琳(2019)『モンゴル語の外來語における音韻構造の探究』立命館大学言語教育情報研究科修士論文。
- 田中真一(2008)『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』ろしお出版。
- 確精札布(1989)『蒙古語察哈尔土語元音的实验语音学研究』『民族语文』4.1-5.
- 呼和(2018)『蒙古語语音声学研究』社会科学文献出版社。
- 宝玉柱(2010)『蒙古語正藍旗土語元音和速率研究』『語言研究』30(1)118-126.
- 李欣(2015)『跨境蒙古語中汉语借詞の元音共時研究』『内蒙古民族大学学报』41(5)92-97.
- Beckman, J.(2003) Positional Faithfulness. *Optimality Theory in Phonology*,311-342.Blackwell Publishing.
- Gordon,M.K.(2016) *Phonological Typology*. Oxford University Press.

36